繪事比肩

福

上

題繪事比肩

畫人哉石燕東都無畫人者斯焉取斯乃歲石燕圖畫和漢人物搜述索偶寫起累百疉爲三巻名曰繪事比肩山水花鳥繼之上梓云而其所收擧者皆就史籍考據焉率非誣誕慌惚之事石燕偶來告余曰願乞一言

以付剞劂、余乃開巻細玩、則衆形萬
態、毎紙改観、中國與　皇和、氣類相
接、左右相敵、詩曰猗重較兮、可以爲
喩矣、余雖未嘗學畫圖之事、粗陳其
狀、巧笑倩兮、美目盼兮、赳赳武夫、威
而可畏、峩峩髦士、儀而可象、被髪有
焉、剃髪有焉、精可以凝、眞可以棲、如

是之類對坐雙立殊客國人神交冥
契究如共遊一塗同會一堂也噫嘻
千里而比肩信不虛矣豈其類上益
三毛而已哉豈其飛白拂瞳子而已
哉傳神之妙正在阿堵之中古不云
乎雖小道必有可觀者焉石燕與石
燕也板刻既成流傳寢廣想使覽者

手ニ披キ心ニ寄セ又何ツ快キ也

安永六年丁酉十二月

芸閣　千葉玄之撰

雲夢　小澤安親書

後序

去ふ書予か有ゆゑこまちを
見立るふ年風三晦さき巻和漢
名の隠流安ふ遊帰中に飛ぶ川
縁風を見しそ中有るふ八古乃
皆志ちを感し勇ちをよ語ひ
あるふ為義人をおこし復士城
志さふそハ君子り妙なるふ学力の

繪事比肩巻之上

○帝舜
○仁徳皇
○西王母
○玉津嶋
○西施
○小町
○張良
○業平
○利休
○陸鴻漸

帝舜

史記に曰舜五絃の琴を
弾じ南風の詩を歌ひしに
とも其意ハ南風吹て世を
あたゝかにし草木も緑を
生じ花咲色出育する
ごとく萬民をゆたかにし
五穀をこのませ太平に
治めしときとなり

仁徳天皇

此時世の中太平にて五穀よくみのり一日天皇高楼にのぼり民家を望みたまひて

高き屋にのぼりて見れば
煙たつ民の竈は
にぎはひにけり

西王母

列子曰周の穆王崑崙山にのぼりて西王母に逢ひ瑶池の上に酒宴せしと又七月七日青鳥飛来りしかば西王母漢乃武帝乃別殿に下り仙人の道を物語せしよし

玉津嶋

日本紀曰應神天皇の孫忍坂大中姫の妹允恭天皇の后なり容姿世にたぐひなく艶色衣を徹て光れり時の人衣通姫と云

我せこの来べき宵なりさゝがにの
くものふるまいかねてしるしも

西施

西の方に家居し姓は施ゆへ西施といへり越の国にて薪を採し仙女あり越王句践是を呉王に献ず呉王是を日夜愛しく国を滅せり色欲は慎しむべし

小野小町

小野の良実の女なり仁明天皇承和乃比の人なり相坂にて死せりとあり

あふ坂乃関の清水に影見えて
今やひくらんもち月の駒

張良

字ハ子房面美女の
ごとく前漢の高祖の
ため計をなし
天下を定しも
下邳圯上の黄石公
の履をとりて兵法
の書を授りしより
簫を吹て
楚の大軍を
散せし
とあり

業平

體貌閑麗天下の美男なり深秘抄にいはく業平幼名曼陀羅丸真雅僧正に従ひ密法を学びしゆへ詠歌多く真言の密旨に叶ふと云元慶四年五月廿八日卒去歳百五十六なりけり

陸鴻漸

唐の世の人なり茶経を作り煎茶炙茶の法茶の具二十四事を製し都統籠に貯へ遠近是を傾慕せり

一時に名あり数寄のみちに於て千といふ氏となのりし千阿弥を改め子孫同朋の役となり名を先祖ハ室町家につかへ名ハ宗易泉州堺の人

千利休